

京都大学大学院文学研究科/21世紀COEプログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

ヨーロッパにおける人文学知形成の 歴史的構図

NEWSLETTER

No. 8

2007/2/20

■ 活動報告

年度末の忙しい毎日をお過ごしの方も多いかと存じます。私たち京都大学文学研究科の現行の21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」は、この年度末で5年間にわたる活動が終了となります。個別の研究会「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」としてのおもだった活動はすでに前年度で終わりとなり、それをふまえた御挨拶を前回のニューズレターに書きましたが、今一度ニューズレターを発行することとなりました。以下には今年度の活動報告と研究調査報告を掲載しておりますので、御一読いただければ幸いです。

本研究会は、これまでの活動のまとめとして、研究会独自の研究成果報告書を出版することとし、メンバーは本年度、論文の執筆と書物作成作業に励みましたが、本年3月に京都のミネルヴァ書房から、南川高志編『知と学びのヨーロッパ史——人文学と人文主義の歴史的展開』として出版される予定です。また、他の研究会と共同で、後述する国際シンポジウムも開催いたしました。これには教員だけでなく大学院生も渡英して参加しております。若手研究者の海外調査派遣と外国人研究者の講演会の開催、そして昨年度末に開催した国際セミナーの成果報告書も作成しております。これらの成果を今後の研究活動に積極的に生かしてゆきたいと念じておる次第です。また、私どもの研究成果に対して、書評などを通じて御批判、御指導をいただければ幸いです。

2007（平成19）年2月

研究会リーダー

南川高志

本研究会は、他のいくつかのCOE研究会と協力し、2006年9月25日に連合王国（イギリス）のケンブリッジ大学で国際シンポジウムを開催した。私は現地でシンポジウム開催のた

めの具体的な準備作業をしたが、以下は「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」のホームページのために執筆した私の開催記を再録したものである。 南川高志

KYOTO - CAMBRIDGE International Symposium
"Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy" 開催記

南川高志

京都大学文学研究科 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」は、本年（2006年）9月25日にイギリスのケンブリッジ大学古典学部を会場として、西洋古典学（西洋古典文学、西洋古代史、西洋古代哲学）と哲学に関する国際シンポジウムを主催した。人文学、とりわけ西洋古典学や哲学という西洋系の学問に関してイギリスでシンポジウムを主催することは、今年100周年を迎えた京都大学文学部の歴史においても初めてのことであろうし、わが国の大学の文学部系の活動としてもきわめて稀なことではないかと思われる。以下はその準備と開催日当日の簡単な記録である。スケジュールの詳細や報告題目は、当シンポジウム専用ホームページ (<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/ihrpc2006/>) を参照されたい。

準備

本シンポジウムの計画は、昨年（2005年）春に立てられ、高橋宏幸教授（西洋古典文学）、南川高志教授（西洋古代史）、出口康夫助教授（哲学）が中心となって準備を進めた。昨年7月にシンポジウムの趣意書とスケジュール案を準備してケンブリッジ大学古典学部申し入れをおこない、同学部から理解と協力を得て準備を本格化させた。とくに、ケンブリッジ大学古典学部上級講師 John Patterson 博士に古典学部と京都大学文学研究科との間の仲介役を引き受けていただき、同博士から準備段階から開催の当日にいたるまで多大の援助をいただいた。本年6月からは古典学部の客員研究員としてケンブリッジでの滞在を始めた南川教授が現地での準備をおこなったが、その際には同学部で客員研究員として研究に励む大草輝政氏（西洋古代哲学）にしばしば助力をいただいた。また、その間に京都では、COE 研究員三谷尚澄氏（哲学）、西村正秀氏（哲学）が中心になってシンポジウムの予稿集がまとめられ、全136ページになる立派な当日配布冊子が完成した。

当日

9月25日月曜日はイギリスらしい雨の日であった。参加者の出足が心配されたが、京大文学研究科教員を含む事前登録済み参加者54名に加えて、当日登録者や飛び入り参加者をあわせると、参加人数は70名ほどになったと思われる。これは計画当初の予想を大きく上回る数で、まずは盛会であったといっていよいであろう。

午前9時に参加登録を開始し、準備した冊子（予稿集）や参加登録者リスト、ランチ・インフォメーションが来会者に配布された。9時30分に予定通り開会し、COEプログラム総括リーダーである紀平英作教授、前のギリシア語欽定講座教授である Pat Easterling 名誉教授、前の哲学教授の Hugh Mellor 名誉教授の御三方から開会の辞にあたるスピーチをいただいた。次いで、シンポジウム開催趣旨を伊藤邦武教授（哲学）が説明し、同教授の司会で午前の部のセッションが開始され、お茶の時間を挟んで12時30分頃まで報告と討論がおこなわれた。

昼食の後、午後1時45分からは午後の部が始まり、古典学セッションと哲学セッションに別れてシンポジウムをおこなった。古典学セッションは比較的広い講義室で開催され、前

半は古典文学をテーマに、お茶の時間を挟んで後半は古代史をテーマに展開された。一方、哲学は3つのサブセッションが順次おこなわれ、ラウンドテーブルの広いセミナー室で報告と議論がなされた。古典学・哲学いずれのセッションも討論はやや時間不足ではあったが、充実した報告に対して貴重な指摘や意見交換がいくつもなされ、意義深いものとなった。

夕刻5時40分には両セッションが終了して、参加者は全員が古典学部内の古典考古学博物館に参集し、古代ギリシア・ローマ彫刻のレプリカに囲まれた神秘的な空間でレセプション・パーティーとなった。和やかな雰囲気の中で歓談が続き、不足気味の討論時間を補う意味でも、日英の研究者間の交流を深める上でも、このレセプションはきわめて有意義であった。

今後

まず何よりも、このシンポジウムの成果を本格的な書物として公刊することが課題である。当日配布された予稿集には、シンポジウム読み上げ用だけではなく、註も付された論文も含まれているので、討論の成果をふまえたセッションのまとめや参加された研究者からの新たな投稿も追加しつつ、できるだけ早いうちに本格的な書物として出版できるよう作業が進められることとなろう。

また、これを機会に、ケンブリッジ大学古典学部、哲学部と京都大学大学院文学研究科との学術交流がいつそう進展するように、双方の機関のさまざまなレベルで努力が重ねられることが重要である。レセプション、及びその後の会食時などで、ケンブリッジ大学の側からもこうした研究交流の機会を継続できるよう希望が表明されており、京大文学研究科内にそうした交流のための組織作りをおこなうことを含めて対応してゆくことができればと希望している。さらに、本シンポジウムでは、ケンブリッジ大学に留まらず、オックスフォード大学、ロンドン大学からも司会者や報告者を得た。これを機に、ケンブリッジ大学ばかりでなく、イギリスの伝統ある諸大学との間にも、研究者個人のレベルを越えて、日本の人文学系の研究機関が組織として交流や研究協力を進展させてゆくようになればと願っている。

■ エッセイ

ニュルンベルクのイメージ—中世から近代、そして現代へ—

林 良彦 (京都大学・院)

1月17日から25日まで、本COEプログラムの一環として、ドイツに研究調査に赴く機会を得た。旅の前半には、キール大学(クリスティアン・アルブレヒト大学)の歴史学ゼミナールのゲルハルト・フーケ教授と面会し、研究の相談に乗っていただいた。また、旅の後半は、ニュルンベルクにあるバイエルン州立文書館で16世紀の手工業者年代記の調査を行なった。この州立文書館は、市立文書館、ゲルマン国立博物館と並ぶニュルンベルク三大文書館の一つだが、窓口にはなぜか漢字で「受付」の表示があり、学術調査のためにこの都市を訪れる日本人の多さを改めて実感した。

今回の旅は、フランクフルトからキールへ北上し、その後ニュルンベルクへと南下し、さらにフランクフルトへと舞い戻る強行軍だったのだが、その道程は必ずしも順風満帆ではなかった。まず、フランクフルトからキールへと向かう際には、アルプス以北のヨーロッパを襲った未曾有の低気圧「キリル」のためにベルリン方面に向かう列車が全線不通となり、ハノーファーを過ぎたあたりで急遽ハンブルク行きの代行バスに乗り換えるはめになった。翌

日朝9時にはフーケ教授との約束があったため一時はどうなることかと案じられたが、深夜1時にはなんとか無事にキールのホテルに辿り着くことができた。また、ニュルンベルクでは大雪のためにこれまた電車の遅延に悩まされた。このように、1月中旬から下旬にかけてのドイツは、「今年のヨーロッパは暖冬」との前情報とは真逆の気候であった。

これらのアクシデントの一方、肝心の目的である研究調査は、フーケ教授をはじめ大学や文書館の関係者の方々の御厚意により、順調に進めることができた。さらに、キール大学ではフーケ教授のコロキウムに飛び入り参加させていただき、中世後期のニュルンベルクの研究を行なっているハイデルベルク大学のカルラ・マイヤー女史の報告を拝聴できたことは、今回の旅の中で予想外のうれしい収穫となった。ニュルンベルクにかんする1500年前後の言説を検討した彼女の報告は、この都市を讃える頌詩と都市イメージとの関係を分析するとともに、1348/49年に起こった手工業者反乱の記憶が、年代記の歴史叙述や謝肉祭を通じて後世へと伝承されてゆく過程をも考察しており、彼女と同様にこの都市のことを研究している身としては、非常に刺激的なものであった。また、頌詩という文学的要素の強いテキストの扱い方についても、参考になる部分が多かった。

さて、この報告に刺激を受けてというわけではないが、本稿の以下の部分では、ニュルンベルクと本COEプログラムの主題である「人文学知」との関係について、簡単に述べてみたい。

マイヤー女史も指摘するように、ニュルンベルクを謳った中世後期の言説と人文学的教養との間には密接な関わりがある。なぜならば、これらの言説は、タキトゥスの『ゲルマニア』の編纂に携わったコンラート・ツェルティスに代表される人文主義者たちによって担われていたからである。その一例として、1512年に出版されたヨハネス・コッホレウスの『ゲルマニア略述 *Brevis Germanie descriptio*』を挙げよう¹。コッホレウスは、宗教改革期にルターを度々批判し、カトリック側のルター理解に後世まで大きな影響を及ぼしたことで知られる人文主義者であるが、宗教改革前夜の1510年から5年の間は、ニュルンベルクにある聖ローレンツ教会附属のラテン語学校の教師職に就いており、教鞭をとる傍らで、ラテン語文法や音楽理論にかんする教科書的な著作を残している。ここで紹介する地理書『ゲルマニア略述』もまた、学校での使用を意図されていた。全八章のうち、冒頭の二章では古代から神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世に至る歴史が、第三章以降ではドイツと近隣諸地域の地理情報が、それぞれ記述されている。

ところで、15世紀末から16世紀初頭のニュルンベルクでは、人文主義的教養を生徒に身につけさせるための教育改革が行われていた。この都市には、聖ローレンツ教会を含めた四箇所の教会に、聖職者と聖歌隊員養成のためのラテン語学校が附属していた。従来は神学の講義や聖歌の訓練が中心であったこれらのラテン語学校では、15世紀末になるとギリシア・ローマ時代の著作が授業で用いられるようになる。また、既存のラテン語学校には飽きたらないツェルティスやヴィリバルト・ピルクハイマーらの人文主義者により、より高度の人文主義的教育を行なう詩人学校が設立された。この詩人学校自体は短期間で廃止されてしまうものの、学校改革の理念はニュルンベルクが宗教改革を導入した後にも存続し、メランヒトンの協力による1526年のギムナジウム設立へとつながってゆく²。

教育におけるこのような人文主義的傾向を、ピルクハイマーと親密な関係にあったコッホレウスの『ゲルマニア略述』もまた帯びている。例えば、ゲルマン人の起源や習俗にかんしてはタキトゥスの『ゲルマニア』、ストラボンの『地理書』、プトレマイオスの『地理学』、大プリニウスの『博物誌』からの引用が見られる。だが、ここで注意したいのは、タキトゥ

¹ Cochlaeus, Johannes, *Brevis Germanie descriptio* (1512), (hrsg.) Langosch, Karl, Darmstadt, 1960.

² ニュルンベルクにおける人文主義の展開の概略については、Pfanner, Joseph, “Geisteswissenschaftlicher Humanismus”, in: *Nürnberg : Geschichte einer europäischen Stadt*, (hrsg.) Pfeiffer, Gerhard, München, 1971. S. 127-133.

スの『ゲルマニア』を引用しているとはいえ、彼がこの著作の中で言及している領域が、ローマ帝政期のゲルマニアの領域とは必ずしも一致しない点である。これは特にゲルマニア東部、すなわち現在の中東欧やロシアについて語られた第六章について顕著であり、モンタニア、ボヘミア、モラヴィア、シレジア、上パンノニア（オーストリア）についての説明に加え、ハンガリー、ポーランド、リトアニア、ロシア、そして「ゲルマニアとキリスト教世界の極限」と彼が記述するリヴォニアまでもがゲルマニアに内包されている³。この原因としては、タキトゥスによる『ゲルマニア』の叙述では、南境のライン川や西境のドナウ川と比べ、ゲルマニアの東境は明確な自然の境界を持っていないこと、さらには商業や移住を通じたドイツと東欧との交流が中世後期には盛んであったことが考えられる。さらに、同時代の風俗や文化の記述においても、アエネアス・シルヴィウスの『ヨーロッパ』やコンラート・ツェルティスの『ノリンベルグ（ニュルンベルク）』など、人文主義者たちの著作の影響が色濃い。

このような『ゲルマニア略述』の叙述において、ニュルンベルクはとりわけ重要な位置を占めている。なぜならば、彼はこの都市を中心にしてゲルマニアを東西南北に分割しているからである。諸地域の記述に入る前に、彼はまずニュルンベルクの叙述にまるまる一章を割いているが、その冒頭ではこの都市の中心性が以下のように記されている。

「ヨーロッパの中心であり同時にゲルマニアの中心でもあるニュルンベルク。このゲルマニアの記述の中で都市ニュルンベルクは中心を占める。なぜならば、この都市はその位置、その言語、その力の点でほぼ中心となるためである。[...] この都市は、ヨーロッパの[南北の]幅であるアドリア海とバルト海からおおよそ等間隔の場所に位置する。さらにヨーロッパの[東西の]幅と人々がみなす、ドン川とカディスへも[この都市からは]ほぼ同じ距離である。したがって、この都市がヨーロッパの中央に位置するというのは正しい。(括弧内は筆者補足)」⁴

この記述は、方言や繁栄の面での中心性と人文学知に支えられた地理上の中心性とを結びつけることでニュルンベルクの優位性を説明するものであるといえよう。特にニュルンベルクの繁栄については、政治・経済・徳・学術の四項目において、この都市がヨーロッパの中でひととき優れていることが謳われている。各項目の解説は簡略ながらも多岐に渡り、市参事会による安定した統治、都市の堅固さ、商業活動の活発さ、市民の信仰心の篤さ、ギリシア語やラテン語文献の豊富さなどに加え、アルブレヒト・デューラーやヨハネス・ノイシェール、ペーター・フィッシャー、エアハルト・エツラウプ、ペーター・ヘレといった高い技術を持った画家や職人の名が挙げられている。

『ゲルマニア略述』に見られるように、16世紀前後におけるニュルンベルクの称揚は人文学知を動員して行なわれていた。また、このような言説は、狭義の人文主義者のみに限定されないことをつけ加えておきたい。例えば、靴工のハンス・ザックスは、1530年にニュルンベルク頌詩を書いている。ラテン語学校で学び古典古代の著作の俗語訳に親しんでいた彼のような手工業者もまた、ニュルンベルクにかんする言説の形成に関与していたのである。さらに、この都市とその周辺の風景を描いたアルブレヒト・デューラーのような人文主義的教養を備えた画家も、ニュルンベルクのイメージ形成に視覚的な面から携わっていたといえる。

³ *Brevis Germanie descriptio*, S.122.

⁴ *Brevis Germanie descriptio*, S.110. また、コッホレウスは言語の中心性にかんして、ニュルンベルクの言葉がシュヴァーベン、バイエルン、フランケン各方言の中間にあると指摘している。

ニュルンベルクと人文学知との関係は、近世以降も形を変えて続いてゆく。16世紀初頭のコッホレウスやザックスと同様、18世紀後半のゲーテもまた、ニュルンベルクに対し賛辞を贈っている。『ドイツの記憶の場』の中でニュルンベルクの章を担当したアンネ・G・コースフェルトによれば、ニュルンベルクは近代に「中世都市のアーキタイプ」「ドイツ人の精神の故郷」として再発見される⁵。もちろん、同時代のまなざしと近代からのそれとでは、同じニュルンベルクを見ている側も見る側の視座は異なってくる。しかし、ロマン主義に基づく近代の言説も、人文主義的教養に根ざした中世後期のテキストと同様に、理想化された都市共同体や街並みの美しさを賛美していることは注目に値する。加えて近代には、この都市に対する関心の高まりとともに、カリタス・ピルクハイマーやヴィリバルト・ピルクハイマー、ツェルティスらの人文主義者たち、あるいはデューラーやザックスなどの画家や詩人たちなど、中世後期から近世初頭にかけてこの都市で活動した人々にも、光が当てられるようになる。

ここでは、ザックスを例に見てみたい。数多くのマイスターリートを作ったマイスタージンガーとして、あるいは謝肉祭劇の劇作家として、また宗教改革を擁護する寓意詩や対話詩の作者として知られるハンス・ザックスは、18世紀後半以降のドイツにおいて、市民的・ドイツ的美徳を象徴する存在とみなされるようになる⁶。このような彼のイメージは、19世紀後半に人口に膾炙する。その最大の理由は、彼を主人公とするワーグナーのオペラ「ニュルンベルクのマイスタージンガー」が1861年に初演され、大きな反響を呼んだことにある。さらにこの時期のニュルンベルクでは、ザックスにちなんだ祝祭も開催されるようになってゆく。1861年7月に開催された歌手の祭典においては、彼の生家が華やかに飾られるとともに、「ドイツに平和と協調が生まれんことを」という彼の詩の一節が引き合いに出され、ドイツ統一の動きを背景にして、彼の愛国者としての側面が強調されている。また1874年には、デューラー像に続き、ザックス像の落成式が行われている。両者の銅像は現在でもニュルンベルクの名所の一つであるが、直立不動の姿勢をとるデューラー像からは「孤高の芸術家」という印象を受けるのに対し、座したザックス像は道行く人々に何かを語りかけるかのようであり、製作当時に彼が「民衆的で親しみやすい詩人」として理解されていたことがわかる。

ザックスに関係する祝祭の頂点をなすのは、1894年のザックス生誕400周年祭である。この生誕祭は、彼が生涯を過ごしたニュルンベルクで盛大に祝われただけでなく、ミュンヘン、ワイマール、ケルン、バーゼル、ウィーン、クラカウ、ベルリンでも開催されている。また、その模様がイギリスやアメリカの新聞で報道されていることから、この祝祭の社会的反響の大きさをうかがい知ることができる。加えてこの祝祭は、様々な社会層によって政治的に利用されていた。例えば、教養市民層が主体の祝祭では、ザックスはドイツ的美徳と教養を備えた模範的な市民として称揚されたのに対し、労働者階級の側は、大商人への不満を抱えた貧しい労働者として彼を捉え、教養市民層によるザックスの「領有」に対抗した。ザックスがこのように容易に政治的プロパガンダに転用された背景には、彼の人物像が、作品そのものに基づくというよりは、「芸術に親しむドイツ的・民衆的な市民」という、どの社会層にとっても利用可能なイメージに由来していたことが挙げられる⁷。

⁵ Kosfeld, Anne, G., "Nürnberg" in: *Deutsche Erinnerungsorte*, Bd. 1, (hrsg.) François, Etienne, u. Schulze, Hagen, München, 2001, S. 68-85.

⁶ Schmidt, Alexander, "Zur Geschichte der Hans-Sachs-Feiern in Nürnberg", *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, Bd. 80, 1993, S. 203-240.

⁷ 1894年の祝祭にみられるようなザックス（あるいはニュルンベルク）の政治的利用は、ナチス期まで継続するものであった。ナチ党によるワーグナーのオペラ「ニュルンベルクのマイスタージンガー」の利用や、ニュルンベルクが重要な党大会開催地であったことを想起されたい。

以上述べてきたザックスの他にも、デューラー、ツェルティス、ピルクハイマー姉弟らは、近代におけるニュルンベルクのイメージ形成において重要な役割を果たしていた。ギリシア・ローマ時代の人文学知に親しんだ彼らの業績が、ニュルンベルクを「ドイツ的な中世都市」として称揚する際に援用されたという点にも、この都市と人文学知との関係の面白さがあるのではないだろうか。

話がいささか大きくなりすぎてしまったようだ。最後に、ニュルンベルクに対する私のイメージを述べて、本稿を終わりたい。この都市の観光の目玉は、こんにちでもやはり中世的な町並みである。加えて、私自身が主に 15、16 世紀を研究していることもあり、19 世紀の人々のように、どうしても教会やカイザーブルク、市庁舎、あるいはデューラーハウスのような中世起源の建造物に目を奪われてしまう。だが、今回の旅行では、この都市が中世以外の時代を積極的に紹介していることに驚かされた。例えば市立文書館では「驚から獅子へ」と題した展覧会が開催されていたが、これは神聖ローマ帝国（驚）が解体しニュルンベルクがバイエルン王国（獅子）へと併合される 1806 年前後の時代にかんする企画であった。また、ゲルマン国立博物館に新設された中世部門の展示室では、この都市が建設される以前の時代、すなわち先史時代からカロリング期にかけて出土した遺物が多数展示されていた。これらの展示を見て、ニュルンベルクの魅力が中世だけに限らないことに気づくとともに、現代におけるこの都市のイメージと文書館や博物館での展示企画との関係についても興味を湧いてきた。次に訪れた際には、この問題について考えながら市内を回ってみたい。

スコットランドにおける中世研究事情

西岡健司（京都大学・院）

2007 年の年明け 6 日、午前 10 時も過ぎた頃、ようやく夜の明けきったグラスゴーを後にし、私はスコットランド北部へと向かうインヴァネス行きの列車に乗り込んだ。正月早々に開かれる学会に参加するためである。真冬のスコットランド。しかも一日の三分の二は夜ともいえる最も日の短い時期。さぞかし列車はすいていることだろうと思いきや、予想外にも大きな荷物を抱えた旅行者で車内は混み合っていた。気づいてみれば、いつしか過ぎゆく駅の表札も英語とゲール語の二言語表記となり、いよいよスコットランドの中心部に入ったことを思わせる。やがて、シェイクスピアの『マクベス』で有名なバーナムの動く森を抜けると、眼前にはグランピアン峻嶒たる山並みがくっきりと姿を現した。

ハイランドへの入り口にさしかかったところで、その先の景色を惜しみつつも私は列車に別れを告げ、ピトロッホリの駅に降り立った。ここは、おもに 19 世紀後半から保養地として栄えた場所で、現在でも周囲の自然を楽しむ観光客に人気の街である。しかし、真冬のこの時期、通りには地元の人とおぼしき人影がまばらに行きかうばかりである。ヴィクトリア朝期の建物が軒を連ねるピトロッホリの街並みは、趣深く歴史を感じさせるものの、それより古いものを街の中に見出すことは難しい。それでもピトロッホリは、その名前自体が十分に中世を物語っている。ピトとは古来よりスコットランドに住まうピクト人の言葉で「一部、分け前」を表す *pett* に由来し、ロッホはアイルランドから渡来したゲール人の言葉で「湖」を意味する。このピクト人とゲール人の融合こそが、中世前期スコットランド史のクライマックスである。さらに、ピトロッホリはハイランドとローランドの境に位置するのだが、中世後半の歴史はゲール語圏のハイランドと英語圏のローランドとの統合を軸に展開し、現代につながる「スコットランド」を生み出すこととなる。そういった意味で、ピトロッホリはまさに中世スコットランドの要に位置しているといえる。このことを意図してか、それとも単に片田舎でのんびり休養をかねてという趣向なのかは定かではないが、毎年正月の最初の

週末になると、スコットランド内外から中世研究者がこぞってこの街に集い、ひとつのホテルをほぼ借りきって二日がかりの学会を催すのである。会場となるのは、その名も“Scotland’s Hotel”という。

私が昼過ぎにホテルに着いたときには、すでに多くの研究者たちがロビーで賑やかに立ち話をしていた。まずは再会を喜びつつ腹ごしらえを終えると、いよいよ会議の開幕である。遅まきながら、学会の名称は“Conference of the Scottish Medievalists”という。「スコットランド中世研究者学会」とでも訳せようか（以下では単に「学会」と略）。この「学会」、私の知る限りでは、日本の多くの学会ともイギリスの他の学会とも些か趣を異にしている。しかし、それは何か特殊な意匠をこらしたというよりも、むしろスコットランドにおける中世研究のあり方をありのままに反映した自然の結果のように思われる。少し詳しく紹介してみることにしよう。

「学会」の第一の特徴は、その学際性にある。お気づきのように、「学会」の名称に歴史という文字は含まれていない。ここに集うのはあくまで中世研究者であって、歴史家もさることながら、考古学者や文学者など中世スコットランドを研究対象とする幾多の分野の専門家が一同に会する。昨今においては学際的な学会といってもなんら珍しくはないが、「学会」における諸学提携の強さには目を見張るものがある。ここで「学会」のスケジュールについて簡単に説明すると、「学会」は土曜日の昼から日曜日の夕方にかけておこなわれ、六本の報告と三つの会議からなる。会場は一つのみで、一つ一つの報告を必ず全員が聞いて一緒に議論をする。したがって、大規模な学会にありがちなように、一つの場所に集まっても結局は各専門別の部会をバラバラにおこなうだけという結果には決してならない。報告時間はそれぞれ質疑を含めて約1時間。濃密な議論である。

今年の「学会」は特別構成であったため（この点は後述）、歴史学以外の特定分野の報告を聞く機会は残念ながら得られなかったが、昨年の学会ではいくつか興味深い報告に触れることができた。とりわけ、ジョン・トッド氏による「セント・ビーズ修道院の埋葬者」に関する報告は鮮明に記憶に残っている。半ばミイラ化した状態で発掘された男性の正体をめぐって展開された議論は、実際の発掘の様子の解説と考古学的な分析に始まり、横臥像の図像学的な解釈に加え、修道院の周辺地域の貴族家系に関する文書史料などを精査した結果が見事な手腕で巧みに織り合わされたものであった。地方の小さな修道院から始まった話は、スリリングな謎解きの形で進められ、果ては北の十字軍にまで及ぶダイナミックな展開を見せた。パワーポイントを利用して要所要所で効果的な写真を織り交ぜたプレゼンの手法も素晴らしく、報告後の会場からの拍手には明らかに格別な賞賛の意が込められていた。質疑では、各分野から新たな情報や建設的な意見が数多く寄せられた。それらを嬉しそうに書き留めていたトッド氏の姿は印象的であり、非常に友好的かつ有益な学際間の交流がおこなわれていることを感じさせた。実はトッド氏の報告自体がすでにその所産なのであり、こうした親密な協力関係は日常的におこなわれている。

ところで、研究者相互間の交流といった点では、学際協力云々に関係なく、概して「学会」の結束力は極めて強い。これには「学会」の起源が大きく関係しているようである。「学会」は1958年にエディンバラに14人の研究者が集うという形で発足した。当時のメンバーのリストを見ると、現在のスコットランド中世研究を築き上げた錚錚たる面々が名を連ねている。少数精鋭による活発な議論は、翌1959年に“Legal Studies”を最初の統一テーマとして幕を開けた。つづく1960年からは報告者を立てる形が採用され、W・ニコレイセン氏が‘The Historical Aspect of Scottish Place-Names’と題する記念すべき第一回目の報告をおこなった。題目からは「学会」当初からの学際的性格がうかがえる。その後、「学会」は少しずつメンバーを増やしながらか開催場所を転々と変え、1977年にはピトロッホリの“Scotland’s Hotel”に定着、1981年には会員数が100人に達する。80年代以降も、中世スコットランド研究の全体的な盛隆を背景に「学会」は順調にその規模を拡大し、1991年に150人、1998年には200人を突破、現在は約250人のメンバーを抱えるに至っている。確かに学会の規模は大き

くなり、文字通り全員が議論に直接参加することは難しくなっているが、一つの場合と時間を皆で共有することを前提とし、各報告に十分な時間をとって議論をするというスタイルは一貫している。

加えてもう一点、「学会」の結束力を端的に示すものとして、会期中になされる会議“Session of Reports”を紹介しておこう。このセッションでは、各種多様な研究プロジェクトチームや学術団体、協会、雑誌の編集部などが年次報告をおこなう。メンバーには各グループの代表による要旨をまとめた報告書が事前に配られる。かなりの分量である。会議自体は各代表者が口頭での短い説明をおこない、フロアからの質問や提案に応じるという形で進められる。例えば出版に関するものを一部紹介すると、議会文書や証書をはじめ、年代記や都市文書、あるいは碑文や演劇関係の記録にいたるまで、多種多様な資料を扱う研究チームが組み立てられており、プロジェクトの進捗状況と今後の見通しが報告される。他にも、**Scottish History Society** や **Scottish Record Society** など各種協会から活動ならびに出版状況の報告がなされ、あるいは、図書館や古文書館、博物館等の施設からは新しいカタログやデータのデジタル化などの有益な情報が提供される。また、雑誌の編集委員からは、近刊号の内容や一年間に投稿された論文の情報なども提供されたりする。つまり、一言で言えば、一年間で進展したスコットランド中世研究に関わる重要な情報を一手にすることができるということである。この会議から理解されることは、各メンバーが必要な情報を共有する体制がしっかりと整備されていることばかりか、「学会」がいかに多くのプロジェクトを組織し、新たな研究グループと既存の団体や協会を束ねる核となり、そして、種々の活動に様々な形でコミットする各々のメンバーの協力の場として有効に機能しているかということである。ちなみに、先に「学会」の名称について、“**Conference of the Scottish Medievalists**”を正式なものとして紹介したが、“**Conference**”というのは実際の会合のことを指す場合に用いるだけで、団体としての名称は“**The Scottish Medievalists**”である。あくまで「人の集まり」であることに力点が置かれていることがわかるであろう。

ところで、1958年に始まった「学会」は、今年で50回の節目を迎えた。この記念大会のために掲げられた共通論題は、“**Medievalists and Renaissances**”である。複数のルネサンスが意味するところのものは三つ。第一は12世紀ルネサンス。第二はいわゆるルネサンス。そして、三番目がスコットランド中世研究におけるルネサンスとしての「学会」50年史である。現在の中世研究の基盤は、まさに「学会」とともに築き上げられたといっても過言ではない。この最後のルネサンスに関しては、ダルハウジー大学（カナダ）のC・ネヴィル氏による“**Scottish Medieval Historiography: The Last Fifty Years**”、ならびに、スコットランド国立古文書館のアラン・ボースウィック氏による“**‘The Scottish Medievalists’: The Past**”という二つの報告が立てられ、加えて“**‘The Scottish Medievalists’: The Future**”という議題でのディスカッションの場が設けられた。50年の研究史を回顧したネヴィル氏は、スコットランド中世研究の独自の特色として、学際性の高度な進展と学界における幅広いコンセンサスの形成を取り上げていた。先に述べたとおり、これらは「学会」を軸とした研究者の相互協力の所産に他ならない。ボースウィック氏の報告の中では、「学会」を直接の母胎として産み出された主要な成果の一覧が示されていたが、どれも現在の中世研究に必須のものばかりである。あえて一例だけ挙げるとすれば、**Peter G. B. McNeill & Hector L. MacQueen (eds.), *Atlas of Scottish History to 1707* (Edinburgh, 1996)** の出版であろうか。これは、総勢86名を結集して作成された480ページにもわたる歴史地図帳で、政治・行政・経済・教会・社会・文化などのテーマ別に詳細な解説付きの地図が満載されている。このアトラスの恩恵にあずからない研究者は考えられない。

さて、これまでは「学会」の特色を長所として捉えて紹介してきたが、一方で、こうした「学会」のスタイルにはマイナスの点も含まれる。特に重要なのは、後続の若手研究者に関する問題である。先に「学会」の規模が順調に拡大していると述べたが、学際的な学会としては会員数250人というのは随分少ないと感じられるであろう。この少人数こそ、今なお先

述の「学会」スタイルを維持できている所以なのであるが、しかし会員数がこれだけ少ないのには理由がある。学会の場に居合わせれば一目で気づくことであるが、若手研究者の数が極端に少ない。実は、「学会」には学部学生や修士課程の院生は一人たりとも出席しておらず、博士課程の院生でさえ二年目になってようやく初めて「ゲスト」として招待される。この「学会」、いわば「一見様お断り」のようなもので、紹介なしに勝手には参加できないのである。しかも、若手の数から察するに、資格のある博士課程の学生が数相応に出席しているとも到底思えない。

若手の積極参加の妨げとなっている要因はいくつか考えられるが、とりわけ今回の会議でも議論されていたのは、報告者の選定に関する事柄である。参加者の基準年齢も高ければ、報告者のそれはさらに高い。ある程度研究を重ねた実力者を報告者に立てることによって議論そのものの質を高めようとする目的は十分理解される。しかし、より若い研究者にも報告の場を与え、「学会」の構成主体として積極的な参与を促すことも重要であろう。スコットランドの大学院生は、自身の研究発表の場となると大学内も含めてほとんどその機会が与えられていない。「学会」としては、議論の質を維持しつつ、若い世代を引き上げる場となるべく求められているように思える。また、「学会」自体の活力を維持するためにも、若手を取り込んだ形での底上げが必要であろう。会議では、博士課程ないしポスト・ドクターの発表を組み込んだスケジュール案が示されたりもしたが、難色を示す研究者もあって容易には事は運ばない。しかし、一会場での報告と議論の共有という点でも、人数的に限界に達しつつある。また、“Session of Reports”にしても、提供される情報の急増によって、文字通り報告のみに終始しがちな現状に不満の声も寄せられていた。「学会」は50年目の節目を迎えて、大きな改革を迫られている。

ネヴィル氏は先の報告の中で、現在のスコットランド中世研究の状況を「巨人の肩に乗った小人」の比喻を用いて表現していた。確かに、今の「学会」を形づくったのも、あるいは現在定説としての地位にある学説の主な基盤を築き上げたのも、第三のルネサンスを生み出した巨人たちであることに違いはない。しかし、どちらの意味においても、巨人の肩はいつまでも安住の地ではない。そのことは、次の世代も自覚している。巨人の肩よりさらに高みへいかにして上るか。“The Scottish Medievalists”は新たな挑戦の時を迎えている。

《後記》

寒い日が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。ニューズレター最終号をお届けいたします。

昨年7月初め、教務補佐に着任いたしました。この編集作業に引き続き、『中世ヨーロッパにおける「過去」の表象と「記憶」の伝承』ならびに『知と学びのヨーロッパ史』の関連業務を終え、3月末には退職いたします。短い間でしたが、たいへんお世話になり誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。(堀内)

EUROHUM 研究会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室(担当:堀内)

Tel/Fax : 075-753-2791

E-mail : eurohum-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurohum/>
